一　パフェをほおばるサラリーマン伝説

　ああ、暇だ。誰も俺に気づいてくれない。もう、何年だ。十年以上は、ここに座っている。それなのに、誰も俺に気づかない。そりゃそうだ。透明だもんな。誰も気づかないのは当り前か。それにしても、あの頃はよかったなあ。

「きゃあ。見てみて。都市伝説よ」
「可愛い」
「でも、単なるおっさんじゃないの」
「その単なるおっさんが、パフェを食べてるから、可愛いんじゃないの」
「あのパフェ、美味しそうね」
「ババナに、チェリーに、チョコレートに、クッキーに、この店の全てのお菓子がのっているわ。きっと、特注よ」
「あたし、食べたい」
「確か、都市伝説パフェって、言ってたわ」
「そんなのあるの」
「メニューにないじゃないの」
「常連しか知らないの。裏メニューよ。マスターが、都市伝説が食べているのを見て、作ったらしいの」
「さすが、商売人」
「おかげで、商売繁盛」
「それは、あたしたちのためよ。お店がつぶれれば、あたしたちの溜まり場がなくなっちゃうじゃないの」
「でも、あんまりお店にお客さんが来すぎると、今度は、あたしたちの座る場所がなくなっちゃう」
「難しいね」
「難しいよ」
「あっ、都市伝説がバナナを食べた」
「一番に食べるんだ」
「バナナが好きなのかしら」
「好きなものから食べる性格なのかな」
「あたしは、好きな物は最後に食べるタイプ」
「あんたのことは聞いていない」
「それにしても、見ていて飽きないね」
「飽きない。このソフトクリームと一緒」

「比べるものが違うと思うけど」
「まるで、ペットみたい」
「そう、都市伝説ペットよ」

なんて、女子高校生の会話が昨日の、いや、今さっきの事のように思い出されるよ。俺は、この「七人の小人」という名のカフェの伝説となって、二十年になる。
この店は、駅から近く、商店街の入り口にある。一等地だ。学校から家へと帰る女子学生たちにとっては、最高の待ち合わせ場所だ。スマホで、時間と場所を待ち合わせておけば、何人かがやってくる。約束していなくても、誰かがここにいる。全面がガラス張りのため、店の外からでも、店の中に誰がいるのかわかる。
交差点の入り口にあるので、信号が赤で横断歩道の前で待っていると、甘いクレープの匂いが漂ってくる。その匂いの方向に顔を向ければ、ショーケースの中には、イチゴやチョコレート、夏ミカン、メロンなどのシュートケーキが目に飛び込んで来る。客が椅子に座り、サンドイッチをほおばりながら、果汁百パーセントのジュースをガラスの底を突き破らんばかりに飲み干している。こんな状況を見れば、誰だって店の中に飛び込まずにはいられない。
ただし、飛び込めずに、躊躇している者がる。サラリーマンやおっさん、おじいさんたちの男どもだ。この人間世界は、どういう訳か、男は辛党で、女は甘党だと決めつけている。だけど、世の中には例外だってある。男だって、仕事や人間関係などで、性も根も疲れ果てた時に、無性に、甘いもんが欲しくなることがある。そんな時に、甘いもんを頬張れば、生きていてよかった、明日からも頑張れるぞ、という気持ちになるのだが、なかなかそうはいかない。どこからか、どんなところからか沸いてくるのか知らないけれど、女の子どものように、男は甘いものを食べてはいけないという、変なプライド、見栄があり、「七人の小人たち」に飛び込めなのだ。
甘いものだけが原因じゃない。女、子どもの中に、男一人がいやがってという、他の男たちのあこがれや羨望、嫉妬、憎しみなどがないまぜとなった視線も店の中に入る勇気をしぼませてしまう。
自分だって、女子高校生に取り囲まれて、パフェを食べたいという願望があるくせに、素直に表現できないため、実行している者に対し憎しみの目を向ける。性格や根性が折れ曲がっているのか、棒のないアサガオのように、上に登ることが出来ずに、地面近くでもつれあって、底辺を彷徨っている。
それから間もなくだ。赤いネクタイを締め、髪を七・三に分け、黒ぶちの牛乳ビンの底もあるほどのレンズのメガネをかけたサラリーマン風の男が、この店の隅で、パフェを食べている姿を女子高校生やＯＬたちが見るようになったのだ。
誰もいないのに、座ろうとしたら座れない、開かずの座席。その横に座ると、男がちゅうちゅうストローで吸いながら、巨大なパフェを食べている。パファはいくら食べても減らずに、男はただひたすら、パフェに向かっている。パフェだけに関心があるように見えながら、時々は、隣や店中を眺めながら、鼻をひくひくさせ、若い女たちの甘い匂いを嗅いで満足している顔、きもい奴という噂だ。その噂の主が、何を隠そう、いや、何も隠していないが、伝説の俺だ。男たちの

羨望が、欲望が集積して、俺と言う形となったのだ。

「今日もいるよ」
「だって、都市伝説だもの」
「きゃあ。あたしたちの方を見た」
「ストローでちゅうちゅうしながら、上目づかいにあたしを見たわ」
「あんたじゃなくて、あたしを見たのよ」
「でも、すぐに目をパフェに戻したわ」
「照れやなんだ」
「そりゃそうよ。これだけ、あたしたち可愛い女子高校生やＯＬたちに取り囲まれているのよ。照れないほうがおかしいわ」
「でも、よく、女の園の中で、男一人いられるわね」
「男の願望じゃない。その執拗な願望が都市伝説を生んだのよ」
「すごい、推理力」
「学校の勉強は苦手だけど、社会の勉強は得意なのよ」
「社会は大学だものね」
「都市伝説物語りを書いたら？」
「そうね。フェイスブックに載せちゃお」

　こうして、最初は気味悪がっていた女子高生たちも、俺をアイドルにしてくれた。みんなが、俺のことを噂してくれればくれるほど、俺の姿はくっきりとした形となって現れることが出来るのだ。だが、そこに強敵が現れた。おばさま族だ。確か、おばさま族に説教されたことがあったっけ。
「なんで、サラリーマンがあんなところに座っているのよ」
「都市伝説だから仕方がないでしょ」
「いいおっさんが仕事もしないで、一日中、ぷらぷらと喫茶で、カフェを食べている場合じゃないでしょ」
「だから、都市伝説だって」
「いくら都市伝説だからと言って、甘えているんじゃないのよ。甘いのはパフェだけで十分よ。うちの旦那だって、汗水流して、上司や顧客に怒鳴られながら仕事をしているんだから。まあ、そのお陰で、あたしがこうしてカフェでパフェを食べられるんだけどね。そう言う意味では、都市伝説だって仕事をすべきよ」
「ここでパフェを食べているのが仕事じゃないの」
「いい御身分ね。まあ、あたしは都市伝説を見ることができたから文句はないわ。でも、あたしたちがこの店を出たら、さっさと消えなさいよ」
「都市伝説が消えたら、もう会えなくなるわよ」
「あたしたちが来たときだけ、現れてもいいわよ。たまには休憩も必要だろうしね」

　だけど、俺の姿は人間には見えなくなった。
「知ってる？都市伝説が消えたんだって」
「あんまり周りが騒がしすぎて、うっとうしくなったんじゃないの」
「都市伝説だもん。ひっそりと咲く菜の花のようじゃないと、落ちつかなかったんだろ」
「サイン会をやったし、着ぐるや銅像もできたし、バッジやシールは売っているし、一躍人気者だ」
「地方のスターだったんだけどね」
「でも、そのスターがしんどかったんじゃないの。伝説だもの。太陽の下では歩けないよね」
「残念だね。俺たちのあこがれの的だったんだから」
「あこがれもあったし、ねたみや嫉妬もあったよ」
「そりゃそうさ。若いギャルたちに取り囲まれてパフェを食べるなんて、なんて素敵な商売だ」
「もちろん、伝説は好きでやってんじゃなく、俺たち、おっさんの願望が結実したもんだろ」
「そうさ」
「それだったら、もう少し、好意的に見てやったら」
「でも、やっぱり許せないんだよ。俺がギャルたちに取り囲まれるのは許せるけれど、都市伝説ごときが、きゃあきゃあと言われるのは許せないんだよ」
「だから、都市伝説も消えたんだよ。俺たちの願望と一緒に」

　俺は、今、カフェの片隅でコーヒーを啜りながら、一日中、ぼんやりと座っている。マスターも俺を見に来ることはない。たまに掃除に来ることはあっても、俺の存在なんか気づいていない。いや、気づこうとさえしていない。今となっては、思い出してもくれない以上、俺が形となることは無理だ。記憶の片隅に残っているおかげで、姿は見えないけれど、存在することはできている。
　まあ、いい。所詮、伝説なんて、はやり病のようだ。一時的に、熱に浮かされていても、やがて熱は冷める。頭を冷やせば、俺たちの存在なんて消えてしまう。人間の欲望や願望、恐怖心、葛藤、祈りなどから生まれたものだ。それが失われれば消えてしまうのは仕方がない。どうやら、俺も、そろそろ潮時なのかも知れない。ああ、消えていく。消えていく。

ニ　幸福まんじゅうマン伝説

「幸福まん、幸福まん、幸福まんはいかがですか」
　カセットテープに吹き込まれた声が、何度となく、繰り返される。
　だけど、誰も振り向かないし、カセットの声は右の耳から入り、左の耳に抜けるか、もしくは、耳の入る前に、会話や自転車のベルの音、カッカッカッという靴の音が混じり合い、まんじゅうの発音は五十音の一部となり、判読不能となる。
　ここは、商店街の一角にある、和菓子屋だ。まんじゅうや赤飯、せんべいなどの和菓子を製造・販売している。
　特に、力を入れているのが、幸福まんじゅうだ。ひと口大の、カステラ生地で、中は、白あんの焼きおまんじゅうだ。大判焼きならぬ小判焼きと言ってよい。一個五十円という値段の安さは魅力的だが、あまりにも普通過ぎて、昔ながらのなじみの客以外は購入しない。ありふれているということが致命傷になっているのだ。
　松岡には子どもが二人いるが、店がこんな状況なので、後は継がずに、銀行や役所に勤めている。妻も近くのスーパーで、パートで働いている。松岡一人が、この店を切り盛りしている。もちろん、切り盛りするほど忙しくはないが。たまには、自分を手伝ってくれる人が欲しいとは思う、だけど、アルバイト代を出すほど店は儲かっていない。自分一人でやるしかない。客が来た。
「幸福まんじゅうを十個ください」
　子ども連れの、顔なじみの客だ。妻はパートから帰って来ていない。松岡はまだ百個以上売れ残っているまんじゅうの中から十個を袋に入れた。このまま売れ残ると、今晩の夕食の主食とおかずが幸福まんじゅうという不幸な状況に陥ることになる。
「はい。まいどあり」
　松岡は袋にまんじゅうを詰めた。手が伸びてきた。パートに出ている妻が帰って来たのか。いつもよりも早い時間だ。手伝ってくれるのか。その手に袋を渡す。
「はい、ちょうど五百円ね」
「幸福まんじゅうマン、バイバイ」
　客と子どもの声がした。幸福まんじゅうマン？松岡は振り返った。そこには白い着ぐるみが立っていた。
「あんた、誰？まさか、千恵美？」
　千恵美とは妻の名前だ。着ぐるみは返事をしない。首を横に振るだけだ。松岡は着ぐるみを見る。顔はまんじゅう顔で、体もまんじゅう体で、足もまんじゅう足だ。どんな安易な表現だ。だが、まんじゅうとしか言いようがない。額には、幸という字が刻まれている。
「あっ、幸福まんじゅうマンだ」
「面白い」
「カワイイ」
　子ども連れや女子高校生が集まってきて、輪が出来た。みんな、携帯電話で写真を撮り、友だちにメールを送っている。そのメールを見た友人たちが、まんじゅう屋に押し掛けてきた。あっ

と言う間に、店が商店街の通路から見えないくらい人だかりとなった。もちろん、二間ほどの間口の店だ。十人も寄れば店は見えなくなる。
　客たちは幸福まんじゅうマンを撮影した後、紙芝居を見たときと同じように、幸福まんじゅうを一個、二個と買って、口の中に放り込んでいく。幸福まんじゅうマンと言えば、ガッツポーズやシュワッツポーズ、など客の要求に答えている。
　まんじゅうは、あっ、と言う間に売り切れてしまった。客も十分堪能したのか、いっ、と言う間にいなくなった。松岡は、着ぐるみのおかげで、幸福まんじゅうが全て売り切れたことから、ひそかに残していたまんじゅうを一個を、お礼に着ぐるみに渡そうとした。　松岡が、うっ、と叫んだ。着ぐるみも、客と同様、店の前からいなくなっていた。
「えっ、すごいじゃないの。まんじゅう、全て売り切れたの」
　パートから帰って来た妻が驚いた。
「あなた、すごいじゃないの」
　松岡は、自分の力のように言いたかったが、おっ、とそういう訳にはいかない。〇〇、□□、△△、××と、幸福まんじゅうマンのことを話した。
「何を馬鹿なこと言っているの。そんなのいるわけいないわよ。まさか、自分で焼いたまんじゅうを全部食べてしまったんじゃないのね。口を開けて、あーんして。あら、歯にあんこはついていないわね。それに、ちゃんと売り上げはあるわ。まあ、よかったじゃない。でも、幸福まんじゅうマンって、ちょっと安易な名前ね。もう少し、洒落た名前がつけられないのかしら」
　妻の一方的な言い分に、「別に、俺が付けた名前じゃない。客が、一方的にそう呼んでいるんだ」と答える松岡。
「ふーん。そうなの」
　妻は夫の言葉を信用していない様子だった。もちろん、松岡だって、腹の底から幸福まんじゅうマンの存在を信じている訳ではなかった。誰かに手伝って欲しいという願望が、幸福まんじゅうマンという形となって、松岡に夢を見させたのかも知れない。だが、客も幸福まんじゅうマンを見たと言っている。
　と、言うことは、松岡と客の共同幻想として、幸福まんじゅうマンが現れたことになる。松岡は、後継者を望み、客は幸福を求め、その共通した思いが、幸福まんじゅうマンを生みだしたのかもしれない。妻には見えないと言うことは、妻は、この店の後継者を求めてはいないし、幸福になることを求めていない、あきらめている、ことになるのか。
　いや、そんなことはない。幸福まんじゅう屋の妻として、二人の息子の母として、妻は幸せなはずだ。だが、幸せは他人が決めることではなく、本人が決めることなのだ。幸せな状態を幸せとは思わない、当り前のことだと思うことが、本当の幸せなのかもしれない。松岡はそう思った。
　翌日のことだった。朝から、幸福まんじゅうを焼き上げ、店頭に並べると、いつものように、カセットのボタンを押す。「幸福まん、幸福まん、幸福まんはいかがですか」と昨日と同じ声が通りに流れる。いや、同じ声ではない。かなりかすれてきた。だからと言って、改めて吹き込み直しする気はない。このまま、かすれて消えてしまってもいいとも思っている。
「幸福まんじゅうマンだ」

誰かの声がした。松岡は振り返った。そこには、昨日と同じ着ぐるみが立っていた。ひじで隣の妻をつつく。今日は、妻はパートが休みだったので、店を手伝ってもらうことにしていた。
内心、幸福まんじゅうマンの存在が嘘でないことを知ってもらいたかったのだ。
「何？」
レジの釣り銭を数えている妻が前を向いた。
「着ぐるみ？」
幸福まんじゅうマンの周りに人々が集まって来た。と、同時に、まんじゅう屋にもまんじゅうを求めて列が並んだ。
「幸福まんじゅう、一個ください」
「幸福まんじゅう、十個ください」
「幸福まんじゅう、二十個ください」
まんじゅうは焼き上がると同時に、飛ぶように売れた。その間、「幸福まんはいかが。幸福まんはいかが」のカセットテープの声に合わせて、幸福まんじゅうマンは、店の前で、身振り手振りのパフォーマンスで、呼び込みをしてくれた。おかげで、午前中にまんじゅうは売り切れてしまった。
「さあ、今日は、早いけれど、店じまいするか」
「そうね。ほんと、あなたの言うように、着ぐるみのおかげで、商売繁盛だったわ。あら、着ぐるみは？」
松岡は、店の片付けに気を取られていて、幸福まんじゅうマンのことは忘れてしまっていた。
「また、明日、会えるだろう」
「そうね。明日、来たら、ちゃんとお礼を言わなくっちゃ。アルバイト料も少しは出さないと」
「そうだな」

翌日、松岡たちの期待に反して、幸福まんじゅうマンは現れなかった。だが、幸福まんじゅうマンが現れるのを期待して、客はまんじゅう屋にやってきた。
一日飛ばしとか、二日飛ばしとか、はてまた、五日間連続してとか、不規則な登場が、返って、幸福まんじゅうマンの価値を高めた。人々は、幸福まんじゅうマンに会いたいがために、毎日、まんじゅう屋を訪れるようになった。幸福とは全ての人に与えられるものではなく、ひと握りの者にしか与えられないことを知っていたからだ。
卑近な例で言えば、宝くじである。先日、ある売り場から、八億円の当たり券が二枚出たと大騒ぎになった。しかも、調べてみれば、同じ人が、その二枚を購入していたのである。宝くじとは、多くの人がわずかな金を出し合い、一人勝ちを認めるゲームである。幸せは全ての人に与えられるのではなく、選ばれた者にしか与えられないことを、全ての人が容認しているのである。
話を戻す。たまにしか現れない、不連続の登場が、幸福まんじゅうマンの人気に拍車を掛けた。人々は毎日のようにまんじゅう屋を訪れ、幸福まんじゅうマンがいれば、体中を触りまくった。幸福まんじゅうマンに触れば、受験に合格する、宝くじが当たる、子宝に恵まれる、商売繁盛になる。（これだけは、まんじゅう屋が、実際に儲かっているので、真実である。）という噂が

街中に広がった。
人々は我先に、幸福まんじゅうマンを触ろうとした。そのため、幸福まんじゅうマンの白い毛並みは、次第に、人々の手垢で小豆色に変わってゆく。小豆のあんこが外に出たような形である。それはそれで、より一層、幸福の本質に触れられるんだということで、人々は、幸福まんじゅうマンを触りまくった。白く神々しい姿が、黒光りを帯び、ブラックホール化していく。
　また、幸福まんじゅうマンが時折り見せるパフォーマンスも人気だった。体を二つに自分で割ると、中から、白あん、黒あん、時には、納豆やおくらも飛び出て来た。バナナや桃、イチゴなども出てきた。意外な組み合わせに、人々は驚き、今日の中身が何かを期待するようになった。
　松岡も期待した。幸福まんじゅうマンの中身を真似して、自分のまんじゅうの餡に取り入れた。白あん、小豆あん、納豆におくら、バナナにイチゴなどだ。
　客は、これをこぞって買い求めた。特に、粘り気のある納豆やおくらは、ここ一番頑張らないといけない受験生に人気だった。店はますます繁盛した。
　松岡は疲れていた。毎日、毎日、まんじゅうを作ることに飽きていた。いや、飽きるのを超えて、へどが出そうだった。実際に、嘔吐下痢を繰り返した。妻も同様だった。もう、松岡の頭の中には、幸福まんじゅうマンが、不幸まんじゅうマンとなっていた。
　ある日のこと、松岡は倒れた。そして、妻も倒れた。店は休業となった。幸福まんじゅうマンは消えた。松岡が元気に回復して、店を再開させたものの、もう客は幸福まんじゅうマンのことは忘れてしまっていた。「幸福まん、幸福まん、幸福まんはいかがですか」の声だけが、人通りの減った商店街に空しく響き渡るだけであった。

　あれから、何年のことだろう。
　松岡は思い出す。記憶の中、幸福まんじゅうマンの思い出の糸をたぐろうとするものの、たぐりよせられない。それが本当にあったことなのかどうかは、今の、松岡には思い出せないのだ。
　その姿を柱の影からじっと見つめるものがいた。幸福まんじゅうマンだった。松岡の頭の中から消えていたが、ようやく、最近になって、松岡がたまに思い出す時に、姿を現せるようになった。だが、過去の不幸な出来事から、なかなか、正面切って、松岡に幸福まんじゅうマン、登場！と切り出せなかった。だからこうして、今は、テナントの入っていないビルの柱の影に隠れて、幸福まんじゅう屋や松岡、その妻のことを見つめるだけであった。
　会いたいけれど、会えない。その葛藤で、時には、ビルの柱が揺れることもあったが、街行く人日は、誰も気づかない。今、伝説は消えようとしている。

三　ＤＪガードマン伝説

　いやあ。あの頃はすごかったですねえ。肩で風切って歩こうものなら、向こうから来る人とこちらから来る人がぶつかって、カタカタ肩は鳴ったものです。
　今は使われなくなったビルの暗い奥で、一人、呟いているのは、ガードマンである。もちろん、この物語の登場人物である。普通の人間ではない。伝説のガードマンである。伝説のガードマンって、何か特別なことをしていたわけではない。溢れかえる人々を、混雑しないよう、人波がすみやかに流れるよう、笛や身振り手振り、ボードなどを使って、交通整理をしていたのである。もちろん、一人じゃない。繁忙期には、十人以上のガードマンが、この店に、この商店街に張り付いて、客たちに事故がないように働き回っていた。その巧みな人捌きから、伝説のガードマンが生まれたのである。

　お客様。どうぞ、まっすぐにお進みください。肩同士がぶつかっても、決して、怒らないでください。肩ぶつかり合うも多少の縁と言うじゃありませんか。いや、少し違っていましたか。そんなことどうでもいいじゃありませんか。同じ店に買いに来た同志として、仲間として、家族として、愛国者として、互いを認め合いませんか。
　なに、なに。人が多くて、店に入れないじゃないかですか。おっしゃる通りです。今は、確かに、人の流れが途絶えません。行く川の流れと同じです。方向転換しようにも、流れに身を任せなければなりません。でも、大丈夫。人生、山あり、谷あり、川あり、人の途絶えあり。しばらくすれば、必ず、人と人との隙間が空きます。そこがチャンスです。チャンスを待つのも、買い物の楽しみのひとつです。その楽しみを満喫しながら、店に入ってください。私たち、従業員が、笑顔で、お客様を温かくお迎えします。えっ、人が多くて、熱気で、暑くて仕方がないのに、これ以上、温める気かですって。それは大変、失礼しました。お店の中では、ただ今、お茶の試飲コーナーがございます。そこで、ゆっくり落ち着いて、水分補給をしてください。私たち従業員は、お客様の体が一番大切なのです。
　何、タイムセールに間に合わないですか。そうですね。後、五分で、タイムセールスが終わります。でも、後、一時間後には、再度、タイムセールスがあると聞いております。当店では、あんまマッサージ機などを配置したリラックスコーナーがあります。そこで、十分、栄気を養ってから、タイムセールスに望んでいただきたいと思います。何、そんなにゆっくりする時間がないですか。
　それなら、今のタイムセールスは、おしょうゆが安いですか、直ぐ次に、サラダ油が安くなります。今回は、とりあえず、サラダ油をご購入いただき、次回、お醤油の特売日に、改めて、お越しいただければありがたいです。
　何、醤油と油は、全然違う、分離してしまうじゃないか。なるほど、おっしゃる通りです。それでは、当店には、プライベートブランドのお醤油がございます。これは、メーカーに作らせて、名前は当社で販売しておりますので、今、特売の商品と内容は変わらず、しかも、値段は安い。あっ、すいません。これは、わが社の極秘情報でした。お客様だけにお教えいたします。決して

、他のお客様には他言しないようにお願い申し上げます。何、他の客も聞いているって。大丈夫。人は聞いているようで聞いていないものです。もちろん、聞いていないようで、聞いていることもあります。兎に角、今は、私たちにとって、あなた様だけがお客様なのです。

すいません。これだけのお客様がお通りですので、自転車は御遠慮いただけませんか。何、天下の公道なのに、お前にとやかく言われたくない。おっしゃる通りです。ですから、公道でございます。ですから、公として、個人が使用する際にも、他人のことを考えて使用する必要があるのです。人と自転車。これがまともにぶつかれば、やはり、人が怪我をします。自転車も壊れるって。そうです、自転車も壊れます。お互いが怪我をしたり、壊れたりすることを避けるためにも、譲歩する必要がございます。それなら、歩く人が譲歩すればいいじゃないか。おっしゃる通りです。今、人は、お互いに、右に行く人、左に行く人、が、お互いに道を譲りながら歩いております。そう、譲歩しているのです。自転車のお客様も、是非とも、乗車ではなく、譲車してもらいたいものです。

ああ、懐かしいな。これ、全部、俺が言ったわけじゃないけれど、最終的には、伝説のガードマンが言ったことになるから、俺が言ったことになるんだろうなあ。でも、今は、自転車だろうが、車だろうが、走ろうと思えば走れるぐらい、この商店街は閑散としている。ああ、俺の伝説も、このまま消えてしまうのかもしれないなあ。

空虚なビルの片隅の伝説のガードマンは、より一層、暗闇に同化して、伝説は伝えられることなく、消えて行こうとしている。

四　シンバルを叩くサル伝説

「知ってる？昔、おもちゃ屋があったよね」
「おもちゃ屋？ゲームセンターかなんか」
「違うよ。おもちゃ屋だよ。今時の、ゲームやトレーディングカードなんかを売ってるんじゃなく、プラモデルやリカちゃん人形やる人生ゲーム、サッカーゲームなんかを売っていたおもちゃ屋だよ」
「あっ、知ってる。昔、百貨店にもあったよね」
「セルロイドの怪獣や正義の味方のウルトラマンやウルトラセブンも売っていたよ
「あたし、欲しかったんだ。この商店街に来ると、人ゴミをかき分けて、おもちゃ屋のおもちゃをじっと見ていた」
「そう、お母さんが、もう帰るわよ、というまでじっと見ていた」
「俺なんか、もう帰るって言っても、まだじっとしていたから、母さんが怒って、無理やり俺の手を引っ張る者だから、セルロイドの怪獣のように、俺の腕もはずれるんじゃないかと思ったよ」
「でも、本音を言えば、腕がはずれても、体だけが残って、じっとおもちゃを見ていたかったわ」
「言える。言える」
「スーパーマーケットから出てきた時、お母さんは両手にスーパーの袋、お父さんはティッシュペーパーとトイレットペーパーを持って、自由なあたしはおもちゃ屋の前に釘付けになったわ」
「そう、そう。あたしもそうだった」
「俺もそうだった」
「そこで、あたしを出迎えてくれるのが、招き猫じゃなく、シンバルを叩くチンパンジー」
「いたいた。時々、歯を剥いて、キーキーと騒いだっけ」
「バナナが欲しかったのかしら」
「おもちゃだろ。バナナなんか食べられないよ」
「遊んでもらいたかったのよ」
「遊びたかったのは、こっちだよ」
「懐かしいね」
「懐かしいよ」
「今は、あのスーパーも、おもちゃ屋さんも閉まっているわ」
「あのチンパンジー、どこに行ったのかしら」
「もう、シンバルを叩く音は聞こえないね」
「チンパンジーの鳴き声も」
「あの当時、夜中に、おもちゃ屋の前でチンパンジーが現れるという噂を聞いたことがない？」
「ある。ある」

「俺。一度だけど、夜中に、おもちゃ屋に行ったことがあるんだ」
「で、どうだった」
「いたよ。いた、いた」
「本当に、いたの？」
「シャッターの前で、チンパンジーがシンバルを叩いていたよ」
「何かの見間違いじゃないの？」
「いいや、この二つの目で、確かに見たよ」
「噂は本当だったんだ」
「俺たちの願望が形となったわけだよ」
「そうか。夢が叶ったんだ」
「でも、大人になったら、なりたいという夢は叶った？」
「叶わないね。平凡な日常が過ぎていくだけだよ」
「あたしもおんなじ。結婚して、子どもが生まれて、今では孫がいるわ」
「へえ、まだ、若いのに、孫がいるのか」
「若くはないわ。同級生じゃないの。同じ年齢よ」
「店が閉まってからは、チンパンジーが現れて、シンバルンを叩くという噂話を聞いたことがない？」
「聞かないな。飲み会の後。最終電車に乗るため、この商店街を通った時あるけど、元の店の前で、酔っ払いがゲロを吐いて、座りこんでいるのを見た時はあるけど」
「それ、全然、夢がないね」
「醜い現実だけだよ」
「チンパンジーが、再び現れないかしら」
「ほんとだね。チンパンジーに会いたいね。あの頃の俺たちにも」

　おじさんやおばさんたちが立ち去った。後に残ったおしゃべりも消え去った。その中で、かすかだがシンバルを叩く音が聞えた。
「まだ、覚えていてくれていたんだ。キーキー」うっすらとした声だった。
　声の主は、拍手の代わりにシンバルを叩いた。シャンシャン。うっすらとした音だった。
「ひょっとすると、また、現れることができるかもしれないなあ」
　チンパンジーの姿は、まだ、うっすらとしたままで、形となっていなかった。

五　コンコン伝説

　　商店街のはずれに神社がある。神社と言っても、小さな鳥居と小さな社があるだけだ。手水も拝殿も、控え所もない。地元の氏神様で、コンコン様と崇められていた。名前のとおり、狐を祭っていた。
　普段は、近所の人が、散歩がてらに手を合わせたり、掃除をしたりするぐらいだが、年に一回は、祭りが行われた。祭りと言っても、商店街が客を呼ぶために、コンコン様に名を借りたイベントとなり、形骸化していた。その形だけのお祭りも開催されなくなって久しい。コンコン様のことは地元の人からも忘れ去られていた。　その社の中から、扉を開けてそっと窺っている者がいた。コンコン様だ。

「いやあ。昔はよかったなあ。みんな、オイラのことを信じていてくれた。そのお陰で、人に夢を与えることができたんだ。
　例えば、商店街での収穫祭。商店街の歩道に稲を植え、稲穂が垂れると、商店街の連中に稲を刈り取らせ、そのお米で餅をついて、地元の人だけでなく、商店街を訪れるお客さんに振る舞ったんだ。それが幻想でも、みんは、一生懸命、汗をかき、稲を刈り取り、その米を蒸して、木の臼で餅をついたんだ。誰も幻想だなんて思わなかった。信じて疑わなかった。コンコン。
　他に何があったっけ。そうだ、虹のかけ橋だ。商店街の入り口から出口まで、虹をかけたんだ。そりゃあ、子どもたちは喜んだ。虹を渡れるんだから。市内各地から、この商店街に人が集まり、親子で虹を渡ったんだ。中には、虹の橋から落っこちる子どもいたけど、虹の下には雲のクッションを敷き詰めていたから、怪我をすることはなかったんだ。コンコン。
　雲のクッションに寝転びたいために、虹の橋の上から飛び降りる子どもたちもいたっけ。一日、商店街は人で溢れ返った。みんな、幻想を心から楽しんでくれたんだ。コンコン。
　それから、大縄跳び。オイラの九つの尻尾を使って、縄跳びをしたんだ。最近の小学生は、運動不足で、その癖、栄養だけは、ジャンクフードばかり食べて、素材をそのまま生かした喰いもんなんて食べなくなったからなあ。調理してんだけど、素材の形が分からないから、魚だって刺身のまま泳いでいると思っているし、ごはんの上に切れ身が乗ったまま、海でぐるぐると回転していると勘違いしてんじゃないのかなあ。円盤状の輪切りの牛がいるとか、串に刺さったまま鳥が空を飛んでいると思っているんじゃないだろうか。
　だからこそ、街に来て体を動かしてもらわないといけないんだ。少年よ、ゲーム機を捨て、街で遊ぼうだ、一人でする縄跳びはつまらないけれど、みんなでする大縄跳びなら楽しいはずだ。しかも、縄が一本じゃなくて九本なら飛びがいがあるはずだ。でも、九本もあればすぐに引っ掛かって、面白くないじゃないか、だって。そこは、こちらも考えているよ。尻尾をゆっくり動かしたり、わざと、地面につけたりして、みんなが飛べるようにしているんだ。
　他に何があったっけ。コンコン様にちなんだ、仮装行列だ。これは、幻想と現実がないまぜになった、一大イベントだった。　参加者は、みんな、思い思いに、顔に墨や絵の具で染めたり、服装も、きつねやたぬき、はてまた、ゆるキャラの着ぐるみを被ったり、正義のヒーローやマ

ンガの登場人物に扮したりした。これは、現実。そして、行進したんだ。コンコン。
　もちろん、先頭はキツネの花嫁。あの狐（こ）、可愛かったなあ。当り前か、オイラの願望が花嫁になったんだもん。その後ろを、様々なコスチュームの人間たちが練り歩く。そして、圧巻が、花火。行進が終わり、夜も更けた頃に、商店街のドームの屋根が開く。そこには満天の星空。その星空に、花火が打ち上がる。
　第一章が、生き物たちが動き出し、植物が芽吹き、満開の花を咲かせる春。夜空がピンク色に染まったっけ。第二章が、夏。天の川をバックに、宇宙の神秘を醸し出す無数の星をイメージした花火の乱舞。第三章が、収穫のお祝いの秋で、お米やさつまいも、みかんに栗、これ、全部、オイラの大好物、が、花火の形となって打ち上げられる。そして、大収穫祭をテーマに、フィナーレ.は、オイラのあの狐（こ）の顔が花火となる。よかったなあ。コンコン。
　あの頃の賑わいは、夢だったんだろうか。半分夢でもあり、半分現実だったのかな。もちろん、このオイラ自身も夢の存在なのだけど。コンコン。　こうしたお祭りもなくなり、今では、誰も、オイラを祭ってくれなくて、社も朽ち果て、やがて消えていくのかなあ。コンコン。これは、鳴き声じゃなく、咳だ。戸の隙間から風が吹き込んでくるから、風邪でもひいっちゃったみたいだ。もう、寝るか。

　お社に灯されていたろうそくの火が隙間風で消えた。

.六　伝説で街おこしを

「伝説で街おこしだって！」
素っ頓狂な声を出したのは、Ｔ町商店街の役員たちだった。会長の沢野は腕組したまま、にこにこしながら聞いていた。
「そうです。伝説で町おこしです」
　言い切ったのは、街おこしプロデューサーの中上だった。
「そんな、こんな町に伝説なんてないよ」
「あったら、こんなに寂れていないよ」
「昔、賑やかだったってことが、伝説になっているよ」
「それ、皮肉？」
「いや、現実」と、役員たちは、人の話は聞かずに、自分の意見だけを垂れ流す。
「伝説でなくてもいいですよ。とにかく、このままでは、この商店街は本当に死んでしまいます。今こそ、力を合わせて、この街を盛り上きましょう。そのためにも、街おこしのアイデアが必要です」
　中上が叫ぶ。その横で、沢野は腕組をしてうなずく。
「何がある？」
「何もないぞ」
「もし、あったとしても、どうやってやるんだ」
「金はないぞ」
「誰かが支援してくれるのか」
「市や県に頼もう」
「よし。そうだ、これから担当課に押し掛けよう」
「担当課はどこだ？」
「商店街の発展だから、産業振興課だろう」
「いや。商店街に人を呼んでくるのだから観光振興課だろう」
「いいえ。自分たちでやるんです。他人任せはだめです」
　中上が釘を差す。頭を垂れる役員たち。
「知恵を絞りましょう。みんなで意見を出しましょう」
　中上がみんなに語り掛ける。みんなは頭を掻いたり、口をへの字にしたり、メガネをはずしてみたり、貧乏ゆすりをしたり、顔を洗ったり、様々なことをして、無い知恵を絞りだそうとしている。
「そうだ」
　一人の役員が立ち上がった。
「さっき、中上さんから伝説の話が出たけど、この商店街にも、いくつか伝説があったはずだ。それを売りに出したらいいんだ」
「そんな、伝説ありましたかね」

「思い当たらないなあ」
「あったような気もする」
「なかったら、作るか」
「それは人を騙すことになるよ」
「どうせ、伝説自体が人を騙しているようなもんじゃないか」
　役員たちは答えのない不毛な会話を繰り返す。会で答えを出すのが目的じゃなく、時間をつぶして会を終わらせるのが目的かのように。
「そうです。みなさん、この商店街に関係した伝説を探しましょう。今は消えてなくなったり、消えそうな伝説が、きっとこの街にもあるはずです。その伝説にお願いして、この街を活性化させましょう」
　中上が繰り返す。今まで、黙っていた沢野会長の口が開いた。
「伝説を探そう。この街にしかない伝説を！」
役員たちは早速、商店街の各会員の家を訪ね、伝説を探した。

七　伝説詣で・パフェサラリーマンの巻

なんだよ、なんだ。俺の周りに急に人が集まってきやがって。それも、おっさんばかりが。今さっきまで、いい気分でうとうとしていたのに、急に起こしやがって。しかも、こいつら、どこかで見たことがあるぞ。この商店街の店主たちじゃないか。伝説は喫茶店の隅っこで慌てていた。
「こちらの方が、伝説のパフェを食べるサラリーマンです」
　いつもは相手にしない喫茶のマスターが説明している。
「あんた、見えるの？」
　誰かがマスターに尋ねた。
「いやあ、以前は、見えていたんですけど、最近は、話題にする人も少なくて、わたしもとんと忘れていたんで、見えないんですよ。でも、以前と同じならば、この片隅に座っているはずですよ」
　マスターは、忘れていたことが恥じるように、頭を掻きながら、伝説が座っていると思われる席を指差す。
「ほんとうに、いるのかなあ」
　役員たちからは不安の声があがる。
「いますよ」
　中上が断言した。
「伝説は、人間が作り出した創造物です。みんながいると思えば、その思念が固まって、現れてくると思います」
「ホントですか」
「ホントです。とにかく、マスターは、これから毎日、このテーブルにパフェをお供えしてください。パフェを食べたい一心で、伝説のサラリーマンが現れるでしょう」
「そういうもんですか？」
「そういうもんです」
　中上があまりにも断言するので、パフェのマスターを始め、役員たちも頷かざるを得なかった。
「じゃあ、さっそく」
　マスターはカウンターの中に入ると、バナナやイチゴが満載の、四十センチほどの高さの巨大なパフェを持ってきた。
「こりゃ、すごいや」
「わしも食べてみたいや」
「あんたが食べたんじゃ、伝説にならんわ」
「それはそうとして、何か、甘いもんが食べたくなってきたな」
「それじゃあ、休憩といきますか」
「ちょっと、歩き疲れたからなあ」

　役員たちは、伝説の街おこしのことは後に回そうとした。
「みなさん。休憩は後にして、まずは、伝説探しですよ。じゃあ、パフェを食べるサラリーマンを商店街の伝説にしてもいいですか」
　中上は、涎が四十センチほど垂れそうな役員たちに承認をもらう。
「あまりぱっとしないけど、ほかにないからなあ」
「いや、働くサラリーマンの希望の星として、受けるかもしれんぞ」
　これまで、黙っていた沢野会長が口を開いた。
「会長もそうおっしゃることですし、そうしましょう。それじゃあ、次の伝説を探しに行きましょう。それでは、マスター、後をよろしく。伝説を大事に育ててくださいよ」
「はい、わかりました」
　中上や沢野会長、役員たちパフェ店から去っていった。後に残されたマスターは
「育ててくれって言われてもなあ。伝説を育てるのは初めてだし、どう育てていいのかわかんないよ。自分とこの子どもだって、俺が育てたと言うより、勝手に大きくなったし、この犬のタローだって、勝手に大きくなったもんな」
　マスターは、盲導犬のタローを飼っていた。タローはパフェを見ると、テーブルに近づこうとした。
「こら、それは伝説様のもんだ。お前には、他にエサをやるぞ」
　店主はタローの首輪を掴むと、店の入り口の方に連れていった。

「ふう、助かった」
　冷や汗をかいたのは、伝説のサラリーマン。
「俺、昔から、犬が大嫌いだったんだ。正確に言えば、犬の嫌いなサラリーマンで、パフェ好きな奴の思いが、この俺になったわけだけどなあ。多分、そのサラリーマンは、家を一軒、一軒営業で周って、その時に、犬に吠えられたり、噛まれたりしたので、犬が嫌いになったんだろう。犬の話はいいとして、街の奴ら、一体、どういう風の吹き回しだ。これまで、俺のことなんか、忘れていやがった癖に、急に、パフェを供えるだなんて。街おこしか何かって、言っていたなあ。パフェを食べるサラリーマンが、街おこしになるのか。
　それはいいとして、問題は、目の前のパフェだ。お供えって言っていたけど、ホントに喰っていいのかなあ。まさか、毒でも入っているんじゃないだろうな。まあ、毒が入っていたとしても、伝説の俺には、毒なんて効き目がない。とにかく、目の前のパフェを食べるべきか、食べないべきか、それが問題だ。
　うーん。そうだ。食べよう。人間が俺を動物園の動物のように、見世物にしたってかまうものか。毎日、毎日、パフェが食べられるのなら、満足だ。今さえ、よければいいんだ」
　伝説は、そっと、人差し指をパフェの中に突っ込んで、引き抜いた。そして、口の中に入れ、しゃぶった。
「甘い」
　甘い誘惑に負けた。伝説は目の前のパフェをペロリと平らげた。

八　伝説詣で・幸福まんじゅうマンの巻

「あんたのとこの伝説に、是非、お願いしたい」
沢野会長は頭を下げた。
「お願いします」
中上や組合の役員たちも頭を下げた。
その横では、「幸福まんはいかが。幸福まんはいかが」と擦り切れた声のテープが音を出している。
「いやあ、皆さん、頭を上げてくださいよ。そう言われても、私も、最近は、伝説には会ったことはないんですよ。もう、どこかに消えたんじゃないですか」
「いやあ、きっと、どこかから、この店を見ていると思いますよ。さっき、「七人の小人」に行ったんですが、お供えのパフェがきれいに食べられていたと、マスターから連絡が入りました」
「ああ、あの喫茶ですか。確か、女子高校生に交じって、しがない真面目なサラリーマンがパフェを食べる伝説ですね」
「そうです。あなたのところの、幸福まんじゅうマンも、きっと、草葉の陰、いや、ビルの柱の影から、店を見ています。」
中上は何の根拠もなく断言した。
「じゃあ、私はどうしたらいいんですか」
佐藤が尋ねる。
「幸福おまんじゅうを供えてください」
「神棚ですか」
「そうですねえ」
中上は、店の中、商店街のアーケード、道路など周囲を見渡した。
「あそこなんか、いいんじゃないですか」
中上が指を指したのは、向かいのビルの柱だった。
「あそこは、つぶれたスーパーの柱ですよ。あんなところに、おまんじゅうを供えるんですか」
佐藤は首をかしげた。
「ええ。伝説はこのお店にはいなくなったかもしれませんが、遠くに行っていないはずです。ほら、このまんじゅうだって、まだ、温かいじゃないですか」
「それは、出来たてだからですよ」
「まだ、草葉の陰から、いや、つぶれたビルの柱から、この店のことを心配して覗いているはずです」
中上は佐藤の言うことなんか全く聞いていない。
「わかりました。じゃあ、供えてみますよ」
佐藤はしぶしぶ、まんじゅうをビルの柱の下に供えた。
「しばらくして、おまんじゅうが減っていたら、幸福まんじゅうマンがいるということです。そ

の時は、私たちに連絡してください」
「わかりました。また、連絡します」
と、佐藤は言いながら、内心は、野良犬や野良猫が食べたり、カラスがついばんだりするんじゃないかと思っていた。

「まんじゅうが置いてある」
　幸福まんじゅうマンは、目の前のまんじゅうを確認した。柱のかげから手を伸ばせば、すぐに取れる。幸福まんじゅうマンは、これまで、まんじゅうを食べたことがなかった。売り物には手を出さない。これが、幸福まんじゅうマンの信念だった。だが、今は、違う。店の主人が、自分のためにお供えしてくれたのだった。
「食べてもいいということかな・・・」
　幸福まんじゅうマンは逡巡していた。これを食べれば、主人の言うこと、人間の言うことに従わなければならなくなる。これまでは、ボランティア精神で店を手伝っていたが、まんじゅうを食べれば、まんじゅうのために働いたことになる。店の主人とは、これまでの同士の関係から、雇い主と従業員の関係になってしまう。それを危惧しているのであった。あくまでも、自分は、ほくほくで美味しい幸福まんじゅうを世に知らせ、広げるために行動しているのであって、何かの対価として、働いているのではない。だが、目の前の、湯気の立つ、甘いにおいの幸福まんじゅう。このまま見ているだけでは、満足できない。食べられるチャンスが訪れたのだ。
「ひとつくらいならいいだろう。それに、実際に食べてみなければ、本当の美味しさはわからないはずだ」
　まんじゅうマンは自分に納得させた。そして、手を伸ばした。「うまい」当り前だ。自分が伝説となってまで売っているまんじゅうだ。まずいわけがない。だが、初めて食べたのは事実だ。まんじゅうを一個だけ食べて、全てを知ったふりをするのはいかがなものか。やはり、もう一個食べてみないと、本当の味はわからない。
　まんじゅうマンは、更に、まんじゅうに手を伸ばした。「うまい」やはり、二個目も美味しかった。だが、三個目は、ひょっとしたら、作る際に出来そこないで、まずいかもしれない。それが、もし、お客さんに当たったら、幸福まんじゅうはまずいという噂が立ってしまう。いい噂はなかなか広まらないが、悪い噂はすぐに広まってしまう。それを防ぐためにも、もう一個食べて確認しなければならない。まんじゅうマンは更に手を伸ばした。そうこうするうちに、お供えのまんじゅうは一個もなくなってしまった。

九　伝説詣で・ＤＪガードマンの巻

さあ、さあ、みなさん、あ、慌てないで。あ、慌てないで。何、一番、慌てているのが、お前だろって。そう、おっしゃる通りです。私が一番、慌てていました。みなさんの冷静な行動のお陰で、私は落ち着きを取り戻すことができました。本当に、ありがとうございます。何回、お礼を申し上げても足りないくらいです。

どんなに人が多くても、混雑していても、冷静に行動すれば、事故はおこりません。人は右方向で歩けば、決して、ぶつかりません。もし、万が一、ぶつかった場合は、ごめんなさいと謝りましょう。私なんか、謝ってばかりで、首がくの字に折れ曲がっています。他の人が見れば、思わず、く、く、く、くと苦笑するかもしれませんが、これも、ひとつのれっきとした職業病です。その点を御配慮いただきたいと思います。

そうです、私のことなんかいいのです。お互いが気をつけても、どうしてもぶつかったる場合があります。そんな時、謝れば、くそったれという気分もやわらぎます。かっとなった気持ちも落ち着きます。折角、楽しいお買い物です。楽しい街の雰囲気です。お家に帰るまで、楽しい気分で帰りましょう。

ＤＪガードマンは、誰もいないビルのホールで、身振り手振りを加えながら、通称お立ち台なる、単なる木の箱の上に立って、人々の誘導の練習をしていた。人ごみの中で、指示を出すために、この台の上に立つのだった。

商店街に人通りが少なくなって、もう何十年になるのだろうか。

ＤＪは思い出す。人が少なくなるのと同時に、ＤＪのことも忘れられ去られた。あの頃がもう一度、甦って、この街が賑やかになる時に備えて、ＤＪガードマンは、毎日、一回、このホールで練習していた。もちろん、誰も見ていない。誰も見えない。そこに、人間たちがやってきた。見えるはずはないと思いながら、ＤＪは、お立ち台から降りて、今は使われなくなった奥の部屋に隠れた。

「ここですよ、ここ。この台の上に、伝説のＤＪガードマンが立って、ごったがえす人波を誘導していたそうです」

説明するのは、このビルの管理人だった。年の頃なら七十歳は過ぎている。この管理人もこの商店街とともに生きて、今、まさに消えようとしている。中上は管理人が説明するのを聞きながら、ふとそう思った。

「こんなボロい台の上に立っていたんですか」

「ええ、そうです。私も真近で見たことがありませんでした。ホントに壊れかけですね。でも、人ゴミが多いと、台なんて見えませんから、気にならなかったですね。それよりも、群集から体半分抜け出した伝説を見ることはありました」

「そうですか」

中上は頷いた。

「それで、伝説のＤＪガードマンをどうしようと言うのですか」
「再び、交通誘導をしてもらうんですよ」
「交通誘導って言ったって、こんな人っ子一人いない商店街で、何の交通誘導するんですか。だれも、勝手に歩いたって、ぶつかりませんよ」
「いやあ、伝説では、ガードマンのおしゃべりが面白いと聞いています。もう一度、ＤＪガードマンとして、陽の目を見させてやりたいんです」
「陽の目ですか」
「そうです」
　訝る管理人に中上はにこやかに答えた。
「伝説って、どちらかと言えば、あまり陽の当らない場所じゃないですか。折角、人々のために活躍してくれたＤＪガードマンです。私たち、中高年の星として、頑張ってもらいたいんですよ」
「中高年の星ですか・・・」
　かつて、自分も中高年の星として頑張っていたと自負する管理人も思わず頷いた。
「でも、どうやって、協力してもらうんです」
「これですよ、これ」
　中上が取り出したのは、百円ショップで売っているモールや折り紙などの飾り用の品々であった。
「これで、このお立ち台をきれいに飾りましょう。きっと、伝説のＤＪも喜んでくれると思います」
「はあ」
　あまり気乗りのしない管理人に手伝ってもらいながら、中上や商店街の役員たちは、お立ち台（単なる、木の箱）を飾り立てた。
「できた」
　お立ち台は、お神輿のように飾られた。
「それじゃあ、よろしく。伝説のＤＪガードマンさん」
　中上たちは、スーパーの跡から立ち去った。

　伝説は部屋から出て来た。人間たちは誰もいなかった。
「人間たちは何をしていたんだろう。あっ」
　伝説は驚きの声を上げた。箱がきれいに飾られていたからだ。これまで自分がやってきたことが認められて嬉しいような、反対に、今まで日陰の存在だったのに、急に祭り上げられて、恥ずかしいような気持ちだった。
「ああ、どうしようかな」
　伝説は箱に腰かけたまま、考える人の体勢で、ため息をつくのであった。

十　伝説詣で・シンバルサルの巻

「いやあ、もう、そんなおもちゃなんか置いていないですよ」
「そうですか」
「今頃の子は、そんな子供だましのおもちゃなんか欲しがりませんよ。トレーディングカードとかゲーム機器のソフトですよ。もっと頭を使うものですね。おもちゃとは言えないかもしれないですね」
　おもちゃ屋の主人は申し訳なさそうに、中上たちに伝えた。
「じゃあ、もう、伝説は現れないんですかね」
「そうですね」
　主人は首をひねりながら、思い出そうとした。
「二十年前にバブルがはじけて、大手スーパーが二軒も撤退し、この商店街が寂れた後では、見かけていないですね。私自身も、皆さんに言われるまで、伝説のことはすっかり忘れていましたよ」
「そうですか」
「でも、この商店街が賑やかだった頃は、すごかったですよ」
　主人は眼を輝かせ、口の端には唾液の泡を風船のように膨らませながら、しゃべりだした。
「だって、スーパーの出口が、ちょうど、私の店の前でしょ。お父さんやお母さんの買い物が済んだ後は、次は、子どもの買い物の順番ということで、子どもたちは、私の店の前に飛びこんできたものですよ。子どもたちは、正義のヒーローや怪獣、リカちゃん人形などのおもちゃを眺めたり、触ったりしながら、親におねだりしていました。シンバルを叩くサルのおもちゃも活躍してくれました、お客の呼ぶ込みに有効なのは、歌舞音曲ですからね。サルのシンバルを叩く陽気な動きとその音、自分の演奏を自慢するようなキーキーと叫ぶ声に向かって、子どもたちは突進してきたものです。
　それが人気だったのか、この店が閉まった夜中にでも、店の前で、サルのおもちゃがシンバルを演奏するのを見たという人が続出しましたよ。わしは最初、信じていませんでしたが、あんまり、多くの人々が言うので、夜中に、そう、丑三つ時に、ふとんを抜け出して、見に行きました。すると、私の店の前から音がするではありませんか、そう、シンバルの音です。時には、キーキーと勝ち誇ったような、何に勝ち誇っているのかはわかりませんが、声も聞こえてきました。化け物か。幽霊か。祟りか。私は、おそるおそる店の前を、商店街のパルテノン神殿風の柱に隠れて、覗きました。
　そこには、あの伝説の、シンバルを叩くサルが座っていました。私は、あまりの恐ろしさに、自宅に、ほうほうの体で逃げ帰りました。その晩は、一晩中、シンバルの音とサルのキーキーと言う声が耳から離れず、眠れなかったことを今も思い出します。
　翌日、店を開け、サルのおもちゃを見ました。普通のおもちゃです。スイッチを入れると、いつものように、シンバルを叩き、たまに、キーキーと音を出しました。スイッチを消すと動かなくなりました。だから、このおもちゃが化けものじゃないことはわかりましたので、少し、安心

しました。
　でも、伝説のサルのおかげで、本当のサルのおもちゃは急激に売れ始め、サルのおもちゃだけでなく、ヒーローや怪獣、フィギュア、人生ゲーム、サッカーゲームなども売れ、お店は大繁盛しました。これも、伝説のシンバルンを叩くサルのおかげです。今も感謝しています。と、言いながらすっかり忘れていましたけどね」
　店主はここまでしゃべると、商店街の屋根が空いている所から見える青い空に向かって、遠い眼を向けた。
「はい、私としては、結構ですよ。いくらでも、協力しますよ。でも、肝心かなめの、伝説のサルが今はいるのかどうか。あれ以来、街を通る人、ほとんど少なくなっていますが、聞いてみても、伝説のサルのことなんか誰も見ていません。私も夜中に店の前に立ったことがありますが、真っ暗で寂しいだけで、空き缶やお菓子のゴミは落ちていても、伝説のサルはいません。たまに、大きな声が聞こえますが、酔っ払い同士の喧嘩やゲロを吐く音ぐらいですよ。
　昔、伝説のサルがいたと言っても誰も信用しないし、私が、店の儲けのために仕掛けたデマだと言う人もいて、今は、そんな話はしていません。でも、今頃、伝説のサルが現れても、おもちゃのサルはあるのかなあ。ちょっと、おもちゃ会社に在庫を聞いてみますよ」
　と、昔、儲かった時のように、眼を爛欄させながら、再び、遠い目をした。中上たちは、おもちゃ屋の主人の話を聞き、昔、伝説のサルが座っていたと言う場所に、バナナの叩き売りができるほどのバナナをお供えするのであった。

　その日の真夜中のことだ。つるりん。つるりん。パク。パク。バナナをひたすら食べている者がいた。伝説のサルである。
「人間は勝手な生き物だ。俺のことをおびえたり、崇めたり、忘れ去ったり、思い出そうとしたり、状況に応じて、手のひらをころころと何度も返しやがる。キーキー。
　まあ、それでも、少しは俺のことを覚えてくれていたし、俺の大好物のバナナを山ほど供えてくれたので、まあ、許してやるか。うまい。このバナナ、どこの産地だ。フィリッピンか、台湾か。今頃、完熟バナナというのがあるから、それかもしれないな。おかげで、元気が出てきたぞ。よし。ひとつ、昔を思い出して、シンバルでも叩いて、歌でも歌うか。流れる季節の真ん中で・・・」
　伝説のサルは、食べきれないバナナを前にして、シンバルを叩き、勝ち誇ったように、キーキーと一人カラオケを楽しむのであった。

十一　伝説詣で・九尾のキツネの巻

「もう、誰も参詣しなくなって、何年になるんだろう。コンコン」
伝説のキツネは、お稲荷さんの本堂の中にいた。本堂と言っても、仏壇程度の大きさで、申訳程度に、鳥居があって、半畳程度の積み石の上に、本堂があった。
　以前は、商売の神様かなんかと持ち上げられて、秋祭りにはお神輿も出されたが、今では花さえも供えられていない。昔、供えられた花は腐り、枯れて茶色に変色し、ビル風に煽られると、風とともに去ってしまった。次は、本堂の番かもしれない。伝説のキツネも今、まさに、風化しようとしていた。そこに、中上たちが現れた。
「ここです、ここです」
　案内したのは、地元の老人会の久保田だった。
「もう、誰もお参りしないから、場所がわからなくなってしまいましたよ」
　確かに、お堂は、ビルとビルの間の通路のような所にあり、そのまま、通り過ぎても気づかないような場所だ。
「まあ、私も、めったにお参りはしませんけど」
　久保田は、ばつの悪そうな顔をした。中上たちは改めて、お稲荷さんを見た。確かに、古ぼけていて何の変哲もない。これを伝説と言うのには難しい気がした。だが、他の伝説は、どちらかと言えば、新しく、お稲荷さんはずっと以前から、この場所にあった。その点では、他の伝説に比べて、伝統もあり、由緒もある。このコンコン伝説を除くと、他の四つの伝説では、どうもまがいもののような気がする。もちろん、伝説はうさんくさいものだが、それでも、伝説は事実ではなにしろ、その当時の人々の、肯定にしろ、否定にしろ、思いから生み出されたものであり、真実には間違いない。
「やはり、コンコン伝説ははずせませんよ。それどころか、核となってもらわないといけません」
　中上が会長や役員の前で断言する。
「この商店街は、このお稲荷さんとともに大きくなったようなものだ。中上さんが言うように、このコンコン伝説を核として、新たな伝説の街として、盛り上げていこう」
　会長の言葉に、役員たちも頷いた。
「さあ、それなら、早速、掃除だ。掃除だ」
　久保田が水を巻き、花などを供え、中上たちは、箒で掃き、お堂をきれいに磨いた。
「さあ、お願いしますよ。二礼。二拍手。一礼」
　飯田たちは声を合わせて、銀行で両替したばかりの、金ぴかに光る硬貨を賽銭箱に投げ、この商店街が再び賑やかになるよう願った。

「もう、帰ったのかな」
　お堂の扉を開け、伝説のキツネが出てきた。
「おっ、きれいになっている」

久しぶりに、お堂や周辺が掃除されていることに、驚くとともに、賽銭箱から、自分と同じ黄金色の五円玉がきらりと光っているのに気づいた。
「なんか、街おこしをやるって言ってたなあ。コンコン」
伝説のキツネは、七つに分かれた尾を振りながら、ちょっと仲間に相談してみるか、と呟くと、ぴょんと跳ねて、夕闇に消えた。

十二　伝説たちの集合

ここは荒れ果てたビルの一室。以前は、スーパーがあり、多くの客で賑わっていたが、今では閉鎖され、誰もいない。所有者は、取り壊すのにも費用がかかるため、今でもほったらかしのままだ。ある時期、鳴り物入りで、数十軒の飲食店が入った飲食市場がオープンしたが、一年足らずで閉店して、また、元の寂しいビルに戻った。

そんなビルの一室に、伝説たちが集まって相談していた。背広姿のサラリーマン、幸福まんじゅうマン、ＤＪガードマン、シンバルを叩くサル、七尾のキツネだった。

「一体、俺たちに、今さら、何をしろって言うんだ」

最初に口火を切ったのは、サラリーマンだった。口元には、白いアイスクリームがついたままだ。これを見かねて

「どうぞ、これで、口を拭いてください」

幸福まんじゅうマンは、幸福まんのチラシが入った宣伝用のティッシュをサラリーマンに渡した。

「ああ、すいませんね。幸福まんじゅうマンさんは、よく気がつきますねえ」

サラリーマンは器用に、舌で、アイスクリームを舐めた後、「これ、もらっておきますよ」とポケットの中にティッシュを押しこんだ。

「ええ、いいですよ。もう、二十年以上も前のティッシュですから。皆さんも、もし、よかったら、使いますか。いつか、使える日がくると思って、しまっていたんです」

幸福まんじゅうマンは、自分のポケットから、数袋のティッシュを取り出し、ガードマンやサル、キツネに渡した。

「ありがとうございます。汗をかいた後。これ役に立つんですよ」

ＤＪガードマンは手を伸ばして、ティッシュの袋を破ると、額の汗を拭いた。

「最近、オレも、眼やにが出て、困るんだ」

サルもティッシュで眼を拭いた。

九尾のキツネは、「オイラも最近、咳が出て、止まらないんだ」コンコンと口に押し当てた。

「そんなことよりも、これからどうすんだ。今さら、人間のために、何かしてやるのか」

サラリーマンは仲間たちを見回した。

「これまで、俺たちをさんざんほっおっておいて、何が、今さら、街おこしだ。寂れたこの街が、今さら、賑わうことなんかないぜ」

いきり立つサラリーマン。

「パフェで買収されたくせに、よくもそんなこと言うよ。キーキー」

サルが突っ込む。

「お前だってバナナを貰っただろ」

「ああ、貰ったよ。だから、こうして、何かをしてやらないかと集まったんだろ。キーキー」

「まあまあ、仲間同士、喧嘩しないで」

「何が仲間だ。俺は人間の伝説だ。まんじゅうやサルの伝説と一緒にしないでくれ」
「ああ、こちらこそ、不純な動機で生まれたサラリーマンを仲間だと思っていないよ。キーキー」
「誰だ、不純だ」
「不純じゃなければ、欲望丸出しだ」
「何を。エテ公が」
「何を。セクハラサラリーマンが」
　サラリーマンは手に空になったパフェの容器を、サルはシンバルを持ち、対峙した。今にも、一触即発の雰囲気になった。その二人？に間に入ったのが、伝説のガードマン。
「まあ、まあ。久しぶりに、こうしてお会いしたんだから、いがみあわないでもいいじゃないですか。みんな、それぞれの立場もあり、由来もあります。まずは、互いに理解し合いましょう」
「お前だって、人間に買収されているじゃないか」
　サラリーマンの怒りは収まらない。
「あっ、わかりました？」
　ガードマンは、モールや折り紙で装飾された箱の上に立っていた。
「まあ、みんなの気持ちはよくわかるけれど、人間たちの気持ちもわかってあげようぜ。コンコン」
　九尾のキツネが口を開いた。口の悪いサラリーマンも、伝説の重さが違うキツネに対しては、さすがに、何も言わなかった。
「それじゃあ、人間に協力してやるんですね。僕は、賛成です。でも、僕に出来ることは、踊りくらいですけど。それ、パパンが、パン。パパンがパン」と手拍子を打ちながら、幸福まんじゅうマンは幸福まんじゅう音頭を踊りだした。サルがシンバルで、拍子をとる。
「はい、お客様。今から、ショーが始まります。ご覧になりたい方は、どうぞ、こちらのステージの方にお越しください」
　ガードマンが案内する。サラリーマンは、ガードマンに導かれるまま、催し物広場の椅子に座った。キツネは、お神輿に化けると、幸福まんじゅうマンと一緒に、ステージの上で踊った。
「これだよ。これ。これで、この街を元気にするんだ。オイラたちも目覚めて、街おこしをやるんだ。コンコン」
　ステージの下から眺めていたサラリーマンも舞台に上がると、みんなで一緒になって踊り始めた。

十三　商店街の組合事務所にて

「伝説たちに、いろいろとやったけれど、協力してくれるのかなあ」
　一人の役員が呟いた。
「それに、協力してくれると言っても、何をしてもらうんだ」
　中上は笑っていた。
「まあ、これからですよ。まずは、伝説たちが、これまでどおり、動いてくれれば、きっと、何らかの形になりますよ」
「そうかなあ」
「そうですよ」
「まあ、待とう。これまでも、ずっと待って来たんだから。それよりも、私たちが何をするかだ」
　組合長の沢野が腕を組んだ。そこに、「大変だあ。大変だあ」と、「喫茶七人の小人」のマスターが組合事務所に飛び込んで来た。
「どうした」
「で、でた。ついに、で、でた」
「出たって、何が」
「不発弾か」
「まさか。三億円の宝くじが当たったのか」
「お化けか」
「黙ってないで、早く言え」
　肩を揺らし、大きな息を繰り返しているマスターに役員たちが矢つぎ早に質問を浴びせる。
「まあ、皆さん。そんなにせかしたら、しゃべれないじゃないですか。ゆっくりと話を聞きましょう」
　中上がみんなを落ち着かせる。
「お化けじゃないよ。伝説が出たんだ」
　一息ついたマスターがようやく口を開いた。
「えっ」一同が立ち上がった。
「店の奥の定位置に、伝説のサラリーマンが座って、パフェを食べているんだ」
「ほんとうか」
「嘘じゃない」
「店は、伝説見たさに、客で一杯だ」
「そうか。ついに出たか」
「よし、みなさん。伝説に会いに行きましょう」
　中上が事務所から飛び出た。後から、役員たちも続いた。

「あっ、いる、いる」

　中上たちにもはっきりと伝説が見えた。歳の頃なら、四十歳から五十歳。髪は七・三に分け、メガネをかけている。スーツは縦じまで、中は、ピンクのＹシャツと紫色のネクタイを締めている。心は横縞じゃなく、邪なのだろう。女子高校生たちは、伝説の近くの椅子の座り、カワイイ、のだ、キャー、サインしてだのと喚きながら、あっ、アイスクリームを食べた、バナナも食べた、と、伝説の一挙手一投足に、喜びの声を上げている。
　中上たちは、店の中が一杯で中に入れないので、店の外のウインドウからその様子を見つめている。店には入れ替わり立ち替わり、女子高校生やＯＬたちが入って来て、伝説と同じチョコレートパフェを食べながら、喜んでいる。
「何で、あんな奴が、キャーキャーと言われるんだ。俺のほうがかっこいいのに。それに、この店は俺の店だ。伝説の店じゃない」
　マスターは不満を露わにした。
「いいじゃないですか。おかげで、店は大繁盛だし、商店街も人通りが多くなった」
　中上は目を細めた。

「あっちでも、人が集まっていますよ」
　役員の一人が指を差した。
「どこ？」
「本当だ」
「幸福まんじゅう屋の前だ」
「すると・・」
　中上たちは、パフェ屋からすぐ近くのまんじゅう屋に走った。まんじゅう屋の前は人盛りだった。店先では、まんじゅうマンが客の応対をしていた。まんじゅうマンと足下にしがみつく男の子もいたし、母親のスカートを左手で握ったまま、右手で指を咥えて、眺めている女の子もいる。
「パン、パン、パン、パン」
　手拍子が打ち鳴らされた。幸福まんじゅう音頭だ。右手を上げ、右足を出し、左手を上げ、左足を出す。輪踊りが始まった。幸福まんじゅうマンを始め、街行く人々が踊りだす。みんな、口にまんじゅうをほおばりながら踊っている。まんじゅう屋の主人も奥さんも、まんじゅうを作るのを、売るのを忘れて、一緒になって踊りだす。
「あっ、会長。一緒に、どうですか」
　まんじゅう屋の主人が、中上たちを見つけた。
「商売繁盛ですね」
「ありがとうございます。でも、まんじゅうの売り上げよりも、こうしてお客さんが来て、賑わうことが嬉しいんです」
「ええ、本当ですね」
　まんじゅう屋の主人と奥さんは心底、踊りを楽しんでいる。お客さんたちも喜んでいる。その中で、一番、顔面をくしゃくしゃにして喜んでいるのが、伝説の幸福まんじゅうマンだった。久

しぶりに、みんなから思いだしてもらったことで、透明な姿が形となって現れることができただけでなく、一緒に踊れることに満足していた。

十四　伝説の復活

　商店街の真ん中辺りでは、シンバルの音が聞こえる。中上が会長たちに目配せをする。会長たちは頷く。
「シンバルサルの伝説だ！」
　今は閉店中のスーパーの前のおもちゃ屋は、人だかりだ。その人の隙間から除くと、伝説のサルがシンバルを叩き、時に、自慢するかのように、キーキーと唸り声を上げている。
　伝説のサルは、その場で空中に一回転したり、柱に登ったり、観客の頭の上に登ったり走り回っている。サルのサービス精神旺盛な行動に、観客からは拍手喝采の嵐が吹きまくる。観客の笑い声に誘われて、道行く人も、何事かと、人垣の中を覗こうとする。

　どこからか威勢のいい声がする。
「わっしょい。わっしょい。神輿だ、わっしょい」
　商店街の入り口から、お神輿がやってきた。神輿は宙に浮いている。神輿の上には、キツネが立って、うちわを扇いでいる。
「私たちも祭りに参加しましょう」
　中上は、会長や役員たちに声を掛けると、神輿を担いだ。神輿は軽かった。神輿も伝説なのだ。役員たちも神輿を担ぎ、声をあげる。
「わっしょい。わっしょい。神輿だ、わっしょい」

　四つの伝説が一同に現れたものだから、商店街は人で溢れ返り、肩で風を切ると、隣同士がぶつかるほど混雑した。
「こら、痛いだろが。あやまれ」
「そっちがぶつかってきたんだろ。そっちこそ、あやまれ」
　商店街の通りには、あちこちで怒声が起こりだした。怒りが爆発しそうだった。そこに、
「はい、みなさん、楽しんでいますか。すごい、人ですね。こんなにたくさんの人がいたら、ぶつかるんは当り前ですよね。でも、できるかぎり、お互いに気をつけましょう。肩同士がぶつかりそうになったら、少し、斜めに肩をずらしましょう。そう、必殺わざ、肩すかしです。こうすれば、お互いの肩はぶつからないし、心もぶつからない。一石二鳥です。すらすらとこの人通りを抜けられますよ」
　交通整理をしているのは、伝説のＤＪガードマンだった。装飾された箱の上から、身振り手振りで、人々を誘導している。
「はい、そうです。みなさん、大成功です。お互いがお互いのことをほんの、ちょっとでも意識すれば、すべてうまくいくのです。みなさんのおかげで、私も、本当に嬉しいです。
　ああ、こどもが泣いていますね。あっ、起こしてあげてくださった方、どうもありがとうございます。そうです。ほんの、ささいなことで、地球は上手く回るのです。折角、上手く回った世間です。波風立てずに、流れに身をまかせましょう。慌てることはありません。ゆっくりでいい

のです。あんまり早いと、目が回りますよ」
　伝説のＤＪガードマンのしゃべりに、多くの人が頷き、手を叩き、笑った。通りは騒然とした雰囲気から和やかな様子に変わった。

　商店街に伝説の五人？が現れた。伝説を見るため、多くの人々が集まって来た。多くの人に認識され、伝説は、より一層、姿が鮮明になる。
「大成功だな」
　会長がぽつりとつぶやいた。
「ええ、でも、これからですよ。これからが大変ですよ」
　中上は五人の伝説を眺めていた。街は元気を取り戻し、伝説も元気を取り戻した。

　煌煌と明るい場所で、伝説たちが集まっていた。はっきりした形がだんだんと薄れてきていた。
「こうも明るいんじゃ、なんだか自分の居り場がないよな」
　パフェを食べながら、サラリーマンが呟く。
「確かに、私も少し疲れました。肩が凝って仕方がありません。あんまり繁盛しすぎて、店主は、私にまんじゅうばかり作らせて、それに売らせて、自分はと言えば、仕事はせずに、奥の方で、新聞を読むか、飽きると、電話をして、近くのパフェ屋さんやおもちゃ屋さんたちの店主と、マージャンばかり。一体、誰のために働いているのか、わからなくなりますよ。ほんと、やってられません。みなさん、いかがですか」
　幸福まんじゅうマンは、熱いお茶と一緒に、「どうぞ、お茶菓子」にと、幸福まんじゅうを他の伝説たちに配る。
「ありがとう。幸福マンさん。でも、あんた、少し気を使い過ぎなんだよ。だから、肩も凝るんだよ。キーキー。適当にやればいいんだよ。でも、俺も気合が入り過ぎて、シンバルを思い切り叩くものだから、指が膨れ上がって、シンバルから手が抜けなくなっちゃったよ。キーキー」
　伝説のサルは、外せなくなったシンバルでまんじゅうを器用に挟むと、口の中に放り込んだ。
「うん、うまい。でも、餡は小豆だけでなく、バナナ味もあったら、もっと味のバリエーションが広がって、売れると思うよ。キーキー」
　伝説のサルは、文句を言いながらも、もう一個、シンバルにはさんで、口の中に放り込んだ。
「うん、伝説のサルさんの言うとおり、おいなりさん味もあった方がいいね。オイラは、おいなりさんが大好物なんだ。コンコン」
　伝説のキツネは、ゾウの鼻のように、九つの尻尾を使ってまんじゅうを掴むと、口の中に放り込む。
「みんなの言うとおり、オイラだって疲れたよ。一見、神輿に乗っているかのようにみえるけれど、自分の尻尾を使って、支えているだけなんだから。最初は、街の人も、神輿を担ぐのを手伝ってくれたけど、今じゃ、神輿が通ったら、邪魔だと言わんばかりに、押し返されてしまう。おかげで、隅っこの方を通らないといけなくなってしまったよ。コンコン。これじゃあ、何の

ために、街おこしを始めたのかわからないよ。コンコン」
　伝説のキツネは、ぐったりとし、ソファーに掛ける毛布のように、地面に寝そべった。
「まあ、本当に、皆さん、大変ですね。私も一緒ですよ。最初は、私の言うことも聞いてくれましたが、今は、ＢＧＭのように、右の耳から左の耳に抜けて、混雑が解消されません。以前のままです。無視するならばまだ、ましですが、伝説のキツネさんと同じように、交通整理がやかましいとか、お前が道の真ん中に立っているから、混雑するんだとか、いわれのない誹謗中傷を受けて、全く、やってられません。何とかみんなをなだめようと、腰を低くしたものだから、猫背になってしまって。これも職業病ですかねえ」
　伝説のガードマンは、腰を伸ばすため、地面に寝転がった。

「あれ？」
　伝説のサラリーマンが叫んだ。
「幸福まんじゅうマンが見えない」
「お前だって、消えているぞ」
　伝説のサルが言う。
「嘘。本当だ」
　伝説のサラリーマンは、驚き、パフェを落とした。プラスチックの容器だけが通路に転がっていく。
「街を汚したら、いけませんよ」
　伝説のガードマンが、容器を取りに立ち上がろうとしたが、自分の姿も消えかかっていることに気づく。
「もう、終わりだな。コンコン」
　九尾のキツネは、まだ、消えずに残っている尻尾を振った。
「人間たち、俺たちを待ち望んでいたくせに、今では、うっとおしがり、しまいには、無視するようになったんだ。もう、俺たちの存在は必要とないということだ。コンコン」
「それじゃあ、このまま消えてしまうんですかね。キーキー」
「俺たちにとっては、いい休憩時間じゃないかな。何しろ、俺たちは伝説だ。キツネさんのように、何百年単位で生きている伝説もいるんだから、しばらくは、休憩タイムといきませんか」
　伝説のサラリーマンが提案する。
「サラリーマンさんは、これまでもパフェ屋さんの片隅で、ずっと休憩していたんじゃないですか」
　幸福まんじゅうマンが言う。
「あんただって、これまで、物かげから、透明の姿で、まんじゅう屋を眺めていたんだろ。でも、それがあんたにとっては幸福だったんだろ。キーキー」
「まあ、それはそうですけどね」
　まんじゅうマンは頷く。
「じゃあ、当分の間、休憩しよう。コンコン」

「当分の間って、いつまで」
「人間たちが、俺たちを思い出すまで」
「思い出さなかったら」
「それでも、思い出すまで」
「それじゃそれまで」
「お幸せに」
「キーキー」
「コンコン」
「お疲れさまでした」
　さっきまで、車座に座っていた伝説たちの姿は、今は、もう見えない。人間たちの記憶と一緒に、伝説も消えてしまったのだ。商店街は、一時の賑わいを取り戻したが、伝説たちが消えるとともに、次第に、客足が減り、元の寂れた商店街に戻っていった。

十五　新たな伝説

「ここ、昔は、肩がぶつかるぐらい人通りが多かったんだって」
「嘘、そんなこと信じられない。今は、百メートル走をしたって、誰にもぶつからないわ」
「誰が、商店街で百メートルを走る人がいるの」
「そんなイベントしたら、街が賑わうかもしれないね」
「それとも、なんか伝説があれば、人が集まるかも」
「伝説？」
「そう、伝説」
「何の伝説？」
「何でも」
「じゃあ、伝説探す？」
「うん、伝説探そう」
　大学生たちは、パフェ屋からまんじゅう屋、おもちゃ屋など、商店街の店に、伝説を探し求めた。

「そろそろ。俺たちの番かな」
「もう、忘れられてしまっているんじゃないの」
「一時的にしろ、この寂れた商店街を復活させたのはわしたちじゃ」
「復活に貢献したのは、伝説たちであって、俺たちじゃないよ」
「でも、伝説を復活させようとしたのは俺たちだよな。中上さん」
「まあ、そうですけど。僕たちが伝説になっているかどうかはわかりませんよ」
「いいや。わしたちは、伝説になるはずだ。この商店街の中興の祖として、商店街の入り口に石碑が立っているはずだ」
「立てたのは、俺たちじゃないか。自画自賛だろ」
「誰が、じいさん、ばあさんじゃ。それに、そんなに歳をとっていない」
「そりゃ、死んでから数十年が立っているから、歳はとらないけれど、死んだ時は、既に、じいさんだったはずじゃないか」
「いいや、わしはじいさんじゃない。まだ、若い」
「それに、この石碑だって、最近では、誰も掃除してくれないから、俺たちの字がみえなくなっているよ」
「もういい。とにかく、わしたちは死んで、残っているのは、この石碑の中に掘りこまれた字だけじゃ。後は、若い奴らは、もう一度、この商店街を復活させてくれるだろう。なあ、中上さん」
「そうですね。会長。若い人に期待しましょう。いつの時代でも、若い人が新たな世界を切り開くんですから。もし、若い人が、僕らに手助けを頼むのであれば、お手伝いをしましょう」
　中上の言葉に、商店街の会長や役員たちは頷いた。

「あった。こんなところに石碑が」
「なんの、石碑？」
「昔。商店街が寂れた時に、復活させた人たちがいたらしいんだ。その人たちの功績を顕彰したものだよ」
「じゃあ、伝説になるかな」
「伝説だよ」
「でも、誰も知らなかったよ」
「だから、僕たちが、伝説にしてあげるんだ」
「ああ、しんど。バケツに水を汲んで、ぞうきんを持って来たよ」
「ありがとう。さあ、早速、掃除だ」
　大学生たちは、石碑を洗いだした。
「あっ、字が浮かび上がってきたよ」
「なんて書いてあるの？」
「沢野会長だって。それに、中上って字も読めるよ」
　石碑の後ろから、ぼんやりとした人間の姿が浮かび上がってきたものの、掃除をしている大学生たちは誰一人として気づかなかった。